

第一三九師団司令部略歴										
通称号 不屈第三七三〇一部隊										
昭	年	略歴								
20	月	歴								
7	日	摘要								
10	10	9	8	8	8	8	8	8	7	7
8	7	1	25	22	15	9	1	10		
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令          吉林省、敦化において編成完結          爾後敦化付近の警備          日「ソ」開戦により「ソ」軍の来襲を予想し、極力戦力の増強に努め、転戦し          得る状況において待機          停戦          敦化において武装解除          同地において准士官以上と下士官以下に区分され、以後次のとおり行動した。          下士官以下は、敦化第二四二作業大隊（武装解除後一応第三三九作業大隊に編          入したが、上記の大隊に編入変更になつた）に編入          敦化出發          満洲里經由入「ソ」</p>										

2374

	11	10	9
	3	15	
	<p>准士官以上は、将校大隊に編入後、沙河沿飛行場に移動          牡丹江省、掖河に移動          掖河より列車により出発、綏芬河經由入「ソ」          師団長          中将 富永恭次</p>		

2375

至 自											昭	年 月 日	略 歴
											20		
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7		
25	24	20	16	15	18	12	11	9		30	10		
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令                  吉林省、敦化地区において、在滿各部隊よりの転入者を基幹とし、現地応召者を主体として編成完結、同日より同地付近の警備                  敦化地区付近の防衛</p> <p>移駐の命により、敦化出発、各大隊は任地に向かう。                  第一大隊は、敦化县威虎嶺に到着、同地付近の防衛                  第二、第三大隊は敦化县黄松甸に到着、同地付近の防衛                  停戦により各大隊は、各駐とん地を出発、敦化县蛟河に向かう。                  各大隊は、蛟河に到着</p> <p>蛟河において、約五〇〇名（満洲電々、満鉄出身者）現地召集解除                  蛟河において部隊総員の約八〇パーセント現地召集解除                  現地召集解除以外の者は、同地において武装解除</p>													
												摘要	

歩兵第三八〇連隊略歴

通称号 不屈第三七三〇二部隊

2376

至自至自							
11	10	10	9	9	11	10	8
20	25	14	10	9	8	21	31
<p>現地召解者群（下士官、兵）は、奉天、吉林、新京方面に行動。以後南下し、帰国した者および途中「ソ」車に収容され入「ソ」した者等行動状況は区々であつた。</p> <p>沙河沿飛行場に集結</p> <p>将校は、将校大隊として沙河沿出発、牡丹江省掖河に移動</p> <p>掖河着</p> <p>掖河発、列車により入「ソ」</p> <p>下士官、兵は、教化において第二五六作業大隊等に編入以後掖河において第二五〇、第二五五各大隊等に改編</p> <p>掖河出発</p> <p>綏芬河経由入「ソ」</p> <p>連隊長</p> <p>大佐 大沢侃次郎</p>							

2377

昭 20		年		月		日	
8	8	8	8	7	7	30	10
20	15	14	9				
<p>通称号 不屈第三七三〇三部隊</p> <p>歩兵第三八一連隊略歴</p> <p>略歴</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令 吉林省敦化县秋梨溝において在満各部隊からの転入者を基幹とし、現地召集者を主体として編成完結 同日より秋梨溝付近の警備 日「ソ」開戦 第一、第二大隊は、陣地構築のため、鏡泊湖西北付近に出動し、同地において陣地の配備についた。 第三大隊は秋梨溝に残留し、同地付近の警備 間島方面より越境した「ソ」軍を鏡泊湖付近において撃滅する目的で、部隊主力（第一、第二各大隊等）を敦化に集結したが、交戦することなく停戦 第三大隊は、秋梨溝において残務整理後、敦化の部隊主力に合流 敦化飛行場において武装解除 武装解除後、現地召集解除者および離隊者が若干あった。</p>							
摘要							

2378

	9	9	8	11	9
	21	1	23	3	3
<p>大佐 片山 敬吉</p>	<p>連隊長</p>	<p>滿洲里經由入「ソ」</p>	<p>敦化出發</p>	<p>下士官、兵は、敦化第二三七作業大隊等に編入</p>	<p>掖河出發、綏芬河經由入「ソ」</p>
					<p>同地において將校と下士官以下に区分され、以後次のとおり行動した。</p> <p>將校群は、將校大隊に編入後、牡丹江省掖河に移動</p>

2379

昭和20							年			
10	9	8	8	8	8	7	7	月		
20	2	21	20	15	9	30	10	日		
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令            吉林省敦化县大石頭において在満各部隊よりの転入者を基幹とし、現地召集者を主体として編成完結            爾後大石頭地区の陣地構築            日「ソ」開戦            部隊総員（第一、第二、第三各大隊）は「ハルハ」嶺南溝地区に陣地構築のため、同地に向かい行動中停戦            敦化に集結後、同地において武装解除            武装解除後、主として朝鮮在籍者を現地召集解除            離隊者若干            敦化飛行場に集結後、将校と下士官以下に区分され、以後次のとおり行動した。            将校は、将校大隊として沙河沿に至る。            牡丹江省、掖河着</p>							略		歴	摘要

## 歩兵第三八二連隊略歴

通称号 不屈第三七三〇四部隊

2380

	10	9	8	11
	11	1	22	3
			下士官、兵は、敦化第二三八作業大隊に編入 敦化出發	掖河出發、綏芬河經由、入「ソ」
			滿洲里經由、入「ソ」	
			連隊長	
			大佐 遠藤三郎	

2381

昭和20年									
8月					7月				
25	23	21	20	15	12	11	9	30	10
第一三九師団挺進大隊略歴									
<p>通称号 城第一三〇八三部隊 不屈第三七三〇六部隊</p>									
略歴									
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令                  三江省、佳木斯において第七九、第一一二、第一二二、第一二四各師団等の隷下部隊各兵科の要員を主体として編成完結                  日「ソ」開戦                  「ソ」軍の進入により、敦化の師団主力に合流のため、佳木斯出發                  牡丹江に向かう途中、空爆を受け、列車の運行不能となり反転し、綏化に向かう目的で佳木斯に引き返す。                  佳木斯出發、途中降雨多量のため列車の運行遅延                  北安省、綏化着、停戦命令を受け、哈爾濱に移動                  哈爾濱において武装解除                  哈爾濱出發、浜江省阿城に向かう。                  阿城より列車により、牡丹江省横道河子に向かう。                  横道河子到着、海林に移動</p>									
摘要									

2382

	11	10	9	9	9
	7	5	22	2	1
大尉 林 重武	<p>海林着、同地において将校と下士官以下に区分され、以後次のとおり行動した。</p> <p>下士官以下は、海林において第一四二作業大隊に編入後、拉古において第二二作業大隊に改編された</p> <p>同地出発、綏芬河經由、入「ソ」</p> <p>将校は海林において将校大隊に編入後、牡丹江省掖河に移動</p> <p>掖河出発、綏芬河經由、入「ソ」</p> <p>隊長</p>				

2383

		昭 20		年	
		7 7		月 日	
		10 30		10 10	
10	8	8	8	8	7
10	30	25	20	15	12
<p>野砲兵第一三九連隊略歴</p> <p>通称号 不屈第三七三〇七部隊</p> <p>略 歴</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令          吉林省、敦化において野砲兵第一二四連隊要員等を基幹とし、現地召集者を主体として編成完結          敦化付近の警備に任じ、日「ソ」開戦に至る。          「ソ」軍侵入の報により、火炮、弾薬の一部を受領し、対戦準備を実施。          部隊総員（第一、第二、第三各大隊等）は、鏡泊湖陣地に向かい出勤          行動途中、停戦を知り、敦化方面に移動          敦化において武装解除、以後離隊者が若干あつた。          主力は、同地の飛行場に移動後、将校と下士官以下に区分され、次のとおり行動した。          下士官、兵は、敦化第二四一作業大隊等に編入          同地出發</p>					
摘要					

2384

	11	10	9	11
	3	21	2	12
	連隊長 少佐 田久保若松			満洲里經由入「ソ」
	掖河出發、綏芬河經由入「ソ」			將校は將校大隊として敦化第二飛行場に收容された。 牡丹江省、掖河（收容所）に移動







				昭 20
			11 10 9 10	
			8 12 2 8	
			満洲里經由入「ソ」 将校は、将校大隊に編入 沙河沿より牡丹江省、掖河に至る 掖河出発、綏芬河經由、入「ソ」 隊長 中尉 尾上 久	



	11	10	9	11	10	9
	8	12	2	8	13	24
連隊長 少佐 佐久間 鉄治 郎	掖河出發、綏芬河經由入「ソ」			綏芬河經由入「ソ」		
	沙河沿より掖河に移動			行軍により沙河沿出發、牡丹江省掖河に移動		
	將校は、沙河沿において將校大隊に編入			下士官以下は、同地において第二四九作業大隊に編入		

2391

至自		昭		年	月	日	略	歴	摘要
		20							
10	10	9	8						
8	3	1	28	20	15	9	30	10	
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令                  吉林省、敦化において他部隊よりの転入者を基幹とし、現地召集者をもつて編                  成完結                  同地において出動準備中、日「ソ」開戦となる。                  敦化県官地および鏡泊湖付近の部隊に兵器の補給業務を実施中、停戦                  敦化において武装解除                  武装解除後、満鉄社員等を現地召集解除                  部隊の主力は、敦化第二四二大隊等に編入                  同地出発                  満洲里經由入「ソ」                  隊長                  大尉 加藤善之助</p>									

第一三九師団兵器勤務隊略歴

通称号 不屈第三七三一〇部隊



	11
	3
	沙河沿発、牡丹江省掖河に移動 牡丹江省、掖河出發、綏芬河經由、入「ソ」 廠長 獸中尉 齊藤 幸治

2394

昭 20	昭 19	昭 17	年	電信 第一七連隊 略歴 通称号 銳第七五八九部隊
7 7 4	9	10 9	月	
25 10		7	日	
<p>編成改正完結</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成改正下令。</p> <p>除き全滿の電信部隊に編入</p> <p>教育隊解散（練成隊は昭和二十年七月解散）被教育要員は一部の当隊編入者を</p>			略	歴
<p>本部</p> <p>有線中隊 二</p> <p>無線中隊 二</p> <p>材料廠 一</p> <p>教育隊</p> <p>    中隊 有線 三</p> <p>    無線 二</p> <p>    練成隊</p>			略	
<p>編成内容</p> <p>軍令陸甲第七四号により編成下令</p> <p>牡丹江省牡丹江において電信第六連隊を基幹に、現地応召者をもつて編成完結</p> <p>同地において通信線の撤収、通信材料の収束、整備等の作成に従事</p> <p>教育隊を併設。在滿電信隊の初年兵の基本教育を実施</p>			略	

自		至	
8	8	8	8
14	10	9	
<p>本部 有線中隊 三 (第一、第二、第四各中隊) (第三中隊欠) 無線中隊 一 材料廠 一</p> <p>日「ソ」開戦とともに、第一方面軍司令官の直轄となり、方面軍通信隊長の指揮に 揮に入り、牡丹江において隷下軍師団との通信連絡に従事 連隊本部、材料廠、無線中隊主力の行動 第一方面軍司令部の吉林省敦化移動にともない逐次牡丹江を出発、敦化に移動各方 面との通信連絡</p> <p>第一中隊の行動 日「ソ」開戦直前、牡丹江省東寧方面の通信線撤収作業に出発、開戦とともに牡丹 江に帰隊、さらに牡丹江省寧安県鏡泊湖畔の通信線確保のため、寧安県東京城を 経て寧安県南湖頭に移動、通信線を確保</p> <p>第二中隊の行動 間島省明月溝——太興溝間の通信線構築のため牡丹江を出発、主力は大興溝方面よ り他は明月溝方面より構築中停戦</p>			

2396

至自									
11	11	10	10	10	8	8	8	8	8
15	6	8	5	下	30	20	17	15	
<p style="text-align: center;">第四中隊の行動</p> <p>連隊本部の敦化移駐にともない、敦化し寧安―牡丹江間（鏡泊湖北側）の信線確保のため、牡丹江を出発、途中、寧安において反乱満軍の攻撃を受け、寧安県沙蘭鎮付近（阿爾站）に至り停戦</p> <p style="text-align: center;">無線中隊の行動</p> <p>間島の第三軍司令部、汪清縣羅子溝の第一二八師団司令部に、各一箇分隊を遣、主力は牡丹江にあつて第一方面軍司令部との通信に従事。</p> <p>連隊本部敦化移駐にともない主力は敦化に移動</p> <p>停戦となり、各中隊は一部分離者をのぞき各地より敦化に向かい本隊に合流敦化において武装解除</p> <p>将校は敦化将校大隊に編入</p> <p>入「ソ」 「ラーダ」地区に収容</p> <p>下士官、兵の主力は敦化第二五二作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>その他一部は九月二十七日敦化第二六〇作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p>									

2397

11

18

綏芬河經由入「ソ」

連隊長

二代	初代
少佐	大佐
西尾	松原
	作治
横	

<p>至自</p>	<p>昭 20</p>	<p>年</p>
<p>8 8 8 8</p>	<p>8 7</p>	<p>月</p>
<p>28 19 1911</p>	<p>9 10</p>	<p>日</p>
<p>日ソ開戦後、大隊の主力は、東京城に移駐し、東京城——鏡泊湖（北湖頭）間の軍事物資の輸送、ならびに第一戦地区え兵器、弾薬の輸送に任じた。</p> <p>大隊本部、第三中隊、修理小隊</p> <p>石頭——東京城——鏡泊湖間において軍事物資の輸送</p> <p>南湖頭において停戦を知り、敦化县官地に移動</p> <p>官地において武装解除</p>		<p>略 歴</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>牡丹江市において現地召集者（東安、佳木斯、林口、勃利各地区等の在住者）を主体（基幹要員は、戦車隊出身の下士官等）として編成完結</p> <p>編成</p> <p>大隊本部</p> <p>自動車中隊……………三</p> <p>修理小隊……………一</p>
<p></p>		<p>摘要</p>

独立自動車第一一四大隊略歴

通称号 鋭第一四一八部隊  
鋭第一三〇八一部隊

2399

至自								
8	8	8	8	8	8	8	9	8
31	22	20		12	12	110	9	31
<p>敦化飛行場に集結</p> <p>敦化第二三五大隊に編入、哈爾濱——滿洲里經由、入「ソ」</p> <p>第一中隊</p> <p>仙洞、穆稜地区の部隊に対し、通信器材の輸送</p> <p>東京城の大隊本部に合流し、以後入「ソ」まで同行動</p> <p>第二中隊</p> <p>穆稜県興隆屯地区の野砲兵隊（野砲兵第一一六連隊）等に兵器、弾薬の輸送後、東京城方面に南下</p> <p>鏡泊湖畔において停戦を知り、敦化に移動</p> <p>敦化において武装解除</p> <p>敦化飛行場に集結し、大隊本部に合流、以後入「ソ」まで同行動</p> <p>大隊長</p> <p>大尉 湯 浅 正 己</p>								

2400

		10	10	8 8
		28	8	22 13
	<p>福井少尉群</p> <p>依蘭に上陸、一部を同地に残置し、主力は、開拓団員防衛のため方正に移動</p> <p>方正において武装解除後、佳木斯に移動</p> <p>佳木斯において木村作業大隊（長、大岡木村義己）に編入後入「ソ」</p> <p>「ハバロフスク」地区収容所に入所</p> <p>部隊長</p> <p>大佐 西村貞正</p>			

昭 17									昭 18	年 月 日	架橋材料第二九中隊略歴 通称号 鋭第七一〇二部隊	
1	12	11	11	8	8	8	7	7	7			略 歴
1	30	30	28	8	4	3	31	21	7			
特臨編一六令第一〇九号の一により編成下令 広島において編成完結 編成 中隊本部 小隊……………三 宇品港出港 大連港上陸 大連出発、同日朝東洲界通過 東安省虎林着 移駐のため虎林出発 三江省、鶴立鎮着 同地出発 東安省虎林着										略 歴	摘要	

昭 19	昭 18																		
2	12	12	11	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	1	1				
15	4	2	28	19	15	13	6	5	12	7	6	1	10	6					
移駐のため、虎林出發、同日虎林県境通過 部隊の主力は、虎林にあつて国境の警備		中支那安徽省、蚌埠着 山海関通過		東安省、虎林着 部隊の一部は、転地演習（渡河および陣地守備訓練）参加のため、虎林出發		大連出發、同日閔東州界通過		大連上陸 同地出發		高雄港着 同地出發		仏領印度支那「カムラワン」湾着、同日、同地出發		同地出發 台湾、高雄港着		大連港出發 閔東州界通過、同日大連着		虎林出發	

昭												
20												
9	9	9	8	8	8	8	8	8	8	7	3	2
12	11	10	23	21	18	17	15	9	31	17		
<p>三江市、佳木斯着</p> <p>中支派遣隊佳木斯の原隊復帰</p> <p>第一三四師団長の隷下に入る</p> <p>通河地区等の討討伐に参加</p> <p>第一三四師団長の命により、部隊は、依蘭に移動開始</p> <p>部隊の一部は、依蘭県宏克利付近において「ソ」軍と交戦し、損害を出した。</p> <p>依蘭着</p> <p>同地出発、南下</p> <p>方正県方正着</p> <p>同地において武装解除</p> <p>方正より佳木斯に移動</p> <p>佳木斯において杉山作業大隊（長、中尉杉山実夫）に編入</p> <p>佳木斯出発、松花江を船により北上</p> <p>「ソ」領「レーニンスキー」港着、同地に上陸</p> <p>中隊長</p> <p>中尉 杉山実夫</p>												

至自									昭	年
昭	昭								16	
19	18								7	月
17		11	11	8	8	8	8	7	日	
4	5							7	7	
9	8	24	23	20	18	14	11	19	7	
<p>特臨編一六令第一〇九の二により編成下令            善通寺（工兵第五五連隊補充隊）において編成完結            編成            中隊本部            輜重兵小隊 ……………三            坂出港出発            朝鮮、麗水上陸            鮮満国境（図們）通過            東安省虎林着、同地付近の警備            移駐のため、虎林出発、同日虎林県境通過            三江省佳木斯着、同日より同地付近の警備            佳木斯において同地付近の警備            部隊の一部は、三江省鶴立県において国境地区の土工作业</p>										
									略	歴
									摘	要

架橋材料第三二中隊略歴

通称号 鋭第六四一六部隊

					昭 20	自 昭 20 19	自 昭 19 18
9	8	8	8	8	5	4 12 初 下旬	8 11
10	29	21	18	10	9		22 23
<p>部隊の一部は、架橋演習参加のため、中支、安徽省蚌埠に派遣され、同地において演習実施</p> <p>部隊の一部は、森林啓開演習参加のため、三江省、伊春に派遣され、同地において演習参加</p> <p>「ち」号演習参加のため、筒井少尉以下二六〇名は、牡丹江省穆稜地区に派遣され、第一工兵隊司令官の指揮下に入り、陣地構築作業に従事（注、207筒井少尉内地転出後、竹形曹長が隊長となった。）</p> <p>派遣隊中、黒瀧軍曹以下一六〇名は、臨時工兵第三大隊長の指揮下に入り、穆稜陣地の構築に従事</p> <p>日「ソ」開戦となり、部隊主力ならびに派遣隊は次のとおり行動した。</p> <p style="text-align: center;">○</p> <p style="text-align: center;">部 隊 の 主 力</p> <p>佳木斯出発、水陸兩行動群に別かれ、松花江および同江添いに南下</p> <p>方正県伊漢通において水陸兩隊が合流後、方正に移動</p> <p>方正県方正において武装解除後、佳木斯に移動</p> <p>佳木斯到着、同日、同地編成の松岡作業大隊（長、中尉松岡誠治）に編入</p> <p>佳木斯出発、黒河經由入「ソ」</p>							

8	8	8	9	9	9	8
80	22	12	6	2	1	14
<p>注 方正——佳木斯間の軍馬輸送のため、部隊の一部は、八月二十三日方正          出發、九月三日佳木斯に到着、九月十日同地編成の杉山作業大隊（長、          中尉杉山実夫）に編入          九月十一日出発、松花江を船により入「ソ」          穆稜派遣隊          竹形隊は、穆稜陣地を出発          途中、分散行動となり、牡丹江省横道河子、東京城ならびに間島省延吉等にお          いて武装解除。          竹形隊の主力は、牡丹江省鏡泊湖の南湖頭において武装解除。東京城に移動          東京城において秋山作業大隊（長、少佐、秋山輝雄）に編入          同地出發、綏芬河経由、入「ソ」          黒沢隊は、穆稜陣地を撤退後「ソ」軍戦車群と交戦し戦死傷ならびに生死不明          者を出し、寧安県代馬溝に向かう。          代馬溝を通過後、逐次分散行動となった。          黒沢隊主力は、間島省汪清県天橋嶺において武装解除、間島に移動          間島第一二作業大隊に編入</p>						

9
13
間島出発、珥春經由、入「ソ」 中隊長 中尉 田窪 熊一

昭							年	
18								月
9	8	7	7	7	7	7		
18	1	30	26	23	20	19	16	第一六野戦兵器廠略歴 通称号 鋭第二六三三部隊 鋭第九三〇〇部隊
<p>特臨編一六令付第一二八号により編成下令          応召者(約三〇〇名)東京第五八部隊(千葉県松戸)に集結          松戸発          大阪出帆          釜山着          釜山出発          鮮満国境図們通過          牡丹江省河東着          関東軍野戦兵器廠河東支廠内において同支廠の人員を基幹とし内地からの応召者(約三〇〇名)と、在満各地より雇用の軍属若干をもつて編成完結          第二〇軍司令官の隷下に入る。同日より同地付近部隊の兵器、弾薬の補給ならびに修理          東安省鶏寧に移駐のため、河東出發</p>								
								摘要

2409

昭 20	昭 19	昭 18			
5	4	9	8	10	9
5 上旬			14		
<p>             鶏寧着、同日より昭和二十年吉林省敦化（大橋）に移駐まで、同地において兵器、弾薬の補給、修理に任じた。              河東において一部の残置者をもつて支廠を開設              牡丹江省綏陽縣綏陽、綏西に弾薬集積所を設置（後に出張所となる）              警備中隊の増強（約六〇〇名）              出張所の増設              牡丹江省寧安県 石頭              同 大溝 } 後に支廠となる              浜江省珠河県 一面坡              その後昭和二十年六月牡丹江省横道河子、吉林省秋梨溝に出張所を設置した。              第二〇軍司令部、中支移駐にともない、第五軍司令部の隷下に入る。              第一方面軍司令官の隷下に入る。              「と」号演習日参加のため鶏寧より牡丹江省寧安県愛河を経て、吉林省敦化（大橋）に移駐              河東支廠、綏陽、綏西の出張所は愛河に集結、愛河出発、吉林省敦化（大橋）に移駐              逐次、横道河子一面坡出張所に併合           </p>					

		至自		昭	
				20	
10	10	9. 8	8	8	6
13	12	3. 22	15	9	
<p>警備大隊編成のため、奉天付近駐屯の歩兵部隊および隣人約二〇〇名編入各駐屯地において、前記任務を続行</p> <p>日「ソ」開戦となり、兵器、弾薬の収集ならびに地下施設の工事、対空施設の強化に従事し、収集物資の分散に着手。</p> <p>大橋（教化）等において停戦</p> <p>この間において、つぎのとおり武装解除</p> <p>1 本部関係 …………… 大橋</p> <p>2 第一業務隊（いわ隊） …… 沙河沿</p> <p>3 第二業務隊（にわ隊） …… 秋梨溝</p> <p>4 第三業務隊（みわ隊） …… 主力 …… 大橋 一部 …… 大溝</p> <p>5 第一移動修理班（ひな隊） …… 沙河沿</p> <p>6 第二移動修理班（ふな隊） …… 教化</p> <p>7 第三移動修理班（みな隊） …… 教化</p> <p>8 警備隊（けい隊） …… 教化</p> <p>9 勤務中隊（む隊） …… 教化</p> <p>教化第二三九作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p>					

昭				
20				
8	8	8	8	6
				10
21	20	15	9	
				17
<p style="text-align: right;">満州里を經由入「ソ」 部隊長（廠長）</p> <p style="text-align: right;">自 編成当時 至、昭一六、二三</p> <p style="text-align: right;">工兵中佐 五十嵐 ○ ○</p> <p style="text-align: right;">自 昭一六、二三 至 昭一九、一〇</p> <p style="text-align: right;">砲兵大佐 篠原直衛</p> <p style="text-align: right;">自 昭一九、一〇 至 終 戦</p> <p style="text-align: right;">重砲兵中佐 友田昌造</p> <p style="text-align: center;">大 溝 支 廠</p> <p>第三移動修理班（駐屯地、大橋）が、主体となり大橋より牡丹江省大溝に支廠を設置</p> <p>同日より、兵器、弾薬の補給業務を実施</p> <p>日ソ開戦となり、いぜん前記の任務を続行</p> <p>大溝において停戦</p> <p>同地において武装解除</p> <p>沙河沿飛行場に集結</p>				

至自	至自	至自	至自	8	8	8	7	9	9	9	
11	10	10	9	9	8	8	7	9	9	9	
8	18	18	9	24	8	20	15	9	25	20	9
<p>支廠長 中尉 朝野 徹郎</p> <p>支廠長 中尉 松本 幸一</p> <p>注、第三移動修理班長、兼務</p> <p>石頭支廠</p> <p>牡丹江省寧安県石頭の出張所を増強し、支廠を設置 同日より、同地において兵器弾薬の集積並びに交付業務に従事 日ソ開戦となり、前任務の続行 石頭において停戦、同日より敦化に向う 牡丹江省寧安県大溝において、武装解除 敦化第二四六、第二四九作業大隊に分散編入 同地出発 綏芬河經由入「ソ」</p>											

昭 20	昭 20						昭 20	
8	6	9	9	9	8	8	6	
9	1	13	9	4	20	9		
<p>同日より弾薬の集積を実施 日「ソ」開戦となり弾薬の格納ならびに交付を実施 付近の戦列部隊に協力交戦</p>		<p>支廠長 中尉 渡辺 秀之</p>					<p>一面坡支廠 浜江省珠河县一面坡の出張所を増強し、支廠を設置 同日より、兵器、弾薬の集積に従事 日「ソ」開戦となり、とくに防空施設の強化を実施 一面坡において武装解除 海林第一三四作業大隊に編入 同地出發 綏芬河經由入「ソ」</p>	
<p>所を設置 同日より弾薬の集積を実施 日「ソ」開戦となり弾薬の格納ならびに交付を実施 付近の戦列部隊に協力交戦</p>		<p>横道河子出張所 吉林省敦化县大橋より牡丹江省寧安縣横道河子に一〇〇名余を移動させ、出張</p>						

昭										
20										
11	9	9	8	8		9	9	9	8	8
15	27	3	9	1		15	7	2	22	17
<p>横道河子において武装解除            拉古に集結            拉古第一〇作業大隊に編入            同地出発            綏芬河經由入「ソ」            所長            中尉 上田久雄</p> <p>秋梨溝出張所</p> <p>吉林省敦化县大橋の本廠より吉林省敦化县秋梨溝に第二業務隊を主力として移動させ出張所を設置            同日より弾薬の集積、兵器の整備ならびに警戒を実施            日「ソ」開戦後も任務を続行            秋梨溝において武装解除            敦化第二六〇作業大隊に編入            同地出発</p>										

	11
	18
	綏芬河經由入「ソ」 所長 中尉 有村 八郎

年 月 日	略 歴	摘 要	
昭 17	<p>軍令陸甲第一六号により編成下令                      東安省鶏寧県鶏寧において満東軍野戦貨物廠牡丹江支廠を基幹とし、第一九野                      戦貨物廠よりの転属者、その他在満各部より転属者をもつて、編成完結。つぎ                      のとおり設置された。</p> <p>本 廠……………東安省鶏寧県鶏寧</p> <p>東安省林口県林口</p> <p>東安省鶏寧県平陽</p> <p>牡丹江省穆稜県八面通</p> <p>牡丹江省綏陽県綏陽</p> <p>牡丹江省綏陽県河東</p> <p>東安省鶏寧県柳毛</p> <p>東安省密山県永安</p> <p>東安省密山県半截河</p> <p>牡丹江省綏陽県綏西</p>		
3 2			
31 24			

第二五野戦貨物廠略歴

通称号 銳第九八三二部隊  
 銳第九二〇〇〇部隊

略 歴

摘 要

昭 20	昭 20
8	5
9	
<p>同日より国境方面にある物資の集積作業に任ず、 「と」号演習により第一方面軍直轄の貨物廠として、本廠業務を関東軍野戦貨物 物廠に引継ぎ、吉林省敦化付近沙河沿に移駐</p> <p>編 成 内 容</p> <p>本 部 衛生材料移動修理班</p> <p>本部中隊 獣医材料移動修理班</p> <p>第一移動修理班 勤務中隊</p> <p>第四移動修理班 警備中隊</p> <p>同日より移駐にともなう倉庫の新設作業</p> <p>各出張所は付近の支廠に編入、つぎのとおり移動した。</p> <p>林口支廠 …………… ↓ 横道河子支廠</p> <p>平陽支廠 …………… ↓ 一面坡支廠（第二移動修理班）</p> <p>河東、綏陽、支廠 …………… ↓ 大溝支廠（第三移動修理班）</p> <p>八面通支廠 …………… ↓ 敦化出張所</p> <p>更に新設の石頭支廠を加へ各駐とん地にあつて軍需品の分散、集積、補給用の道 路作業、謀略対策諸施設を実施した。</p> <p>いぜん前記の作業を続行中、日「ソ」開戦となり部隊に衣糧諸品の補給</p>	

2418

昭									
20									
8	8	8	8	5	9	9	9	8	8
20	19	18	9		27	23	5	25	22
<p style="text-align: right;">戦闘することなく敦化において武装解除          将校は将校大隊に編入。牡丹江を経て入「ソ」          下士官以下は敦化第二四七作業大隊に編入          同地出発          綏芬河経由入「ソ」          本廠長          初代 主計中佐 石河 六郎          主計大佐 河田 和夫</p> <p style="text-align: center;"><b>横道河子支廠</b></p> <p>「と」号演習により林口支廠を牡丹江省寧安縣横道河子に移駐、横道河子支廠を開設。          同地において付近部隊の糧秣補給業務実施          日「ソ」開戦となり、いぜん前記の業務続行          「ソ」軍進入により戦闘することなく、哈弥浜方面に南下          南下途中、横道河子南方付近において、武装解除し海林に移助          海林第一四七作業大隊に編入</p>									

					昭				
					20				
9	9	9	8	8	5	10	10		
18	9	4	22	9		8	1		
<p>同日「ソ」開戦となり、牡丹江方面より後退する部隊を待機中、停戦となる。</p> <p>一面坡において武装解除</p> <p>主力は海林第一三四作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河経由入「ソ」</p>					<p>一面坡支廠</p> <p>「と」号演習により平陽支廠を浜江省葦河県一面坡に移駐、現地応召者を増員し一面坡支廠を開設</p> <p>同地において、教化に軍需品を集積する任務をもつて、山麓地に洞窟格納工事を実施</p> <p>主計中尉 石原逸三</p> <p>横道河子支廠長</p> <p>一部軍属（女子を含む）は家族とともに新京に南下し帰国</p>			<p>同地出発</p> <p>綏芬河経由入「ソ」</p>	

						昭
						20
9	9	9	8	8	8	5
27	23	5	24	19	9	
<p>一面坡支廠長（兼第二移動修理班長）                  主計 中尉 福田 十一</p> <p style="text-align: center;">大 溝 支 廠</p> <p>「と」号演習により牡丹江省綏陽縣河東および綏陽の支廠を集結し、それぞれ軍需品を、第一九野戦貨物廠に引き継ぎ、一方軍直轄となり、牡丹江省寧安縣大溝において開設同日より道路、資材格納のための洞窟ならびに兵舎構築作業。</p> <p>日「ソ」開戦により、南地区および北地区に軍需品を分散するとともに、前記の工事を続行</p> <p>南北両地区、合併後吉林省敦化に移動し本廠に合流</p> <p>敦化において武装解除</p> <p>敦化第二四七作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p>						

昭					
20					
9	9	9	8	8	5
27	23	5	21	9	
<p style="text-align: right;">大溝支隊長 (兼、第三移動修理班長)</p> <p style="text-align: right;">主計大尉 仲村 支</p> <p style="text-align: center;">敦化出張所</p> <p>「と」号演習により八面通支廠は同地より牡丹江に集結、吉林省敦化に移動し、敦化出張所を開設</p> <p>本廠よりの物資の集積作業、および敦化付近部隊に軍需品の補給業務を開始。</p> <p>日「ソ」開戦となり、いぜん前記の任務を続行。</p> <p>「ソ」軍進駐、戦闘することなく敦化において武装解除</p> <p>敦化第二四七作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>敦化出張所長</p> <p style="text-align: right;">主計中尉 宗 像 六 郎</p>					

						昭
						20
9	9	9	8	8	8	6
27	23	5	22	19	18	9
<p style="text-align: center;">石頭支廠</p> <p>「と」号演習により関東軍野戦貨物廠牡丹江支廠の通化に後退のため、その残置人員および大溝支廠よりの転属者をもつて、牡丹江省寧安県石頭において、支廠を開設。</p> <p>同日より前線貨物廠よりの送付資材の集積作業</p> <p>日「ソ」開戦とともに、付近部隊に軍需品の補給</p> <p>全員石頭出発、吉林省敦化に向かう</p> <p>途中南湖頭において「ソ」軍戦車と遭遇</p> <p>敦化において本廠と合流</p> <p>沙河沿（飛行場）において武装解除</p> <p>敦化第二四七作業大隊に編入。</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河経由入「ソ」</p> <p style="text-align: center;">石頭支廠長</p> <p style="text-align: center;">主計中尉 加来 隆</p>						

2423